二〇二二年 二月
TAKADA GANGI FREE MAGAZINE

つぎつぎ

雁木町家のある高田をつなぐマガジン

つぎつぎ　雁木町家のある高田をつなぐマガジン

流れる時間を観ている者

世代が交わる一時

#ミセの使い道

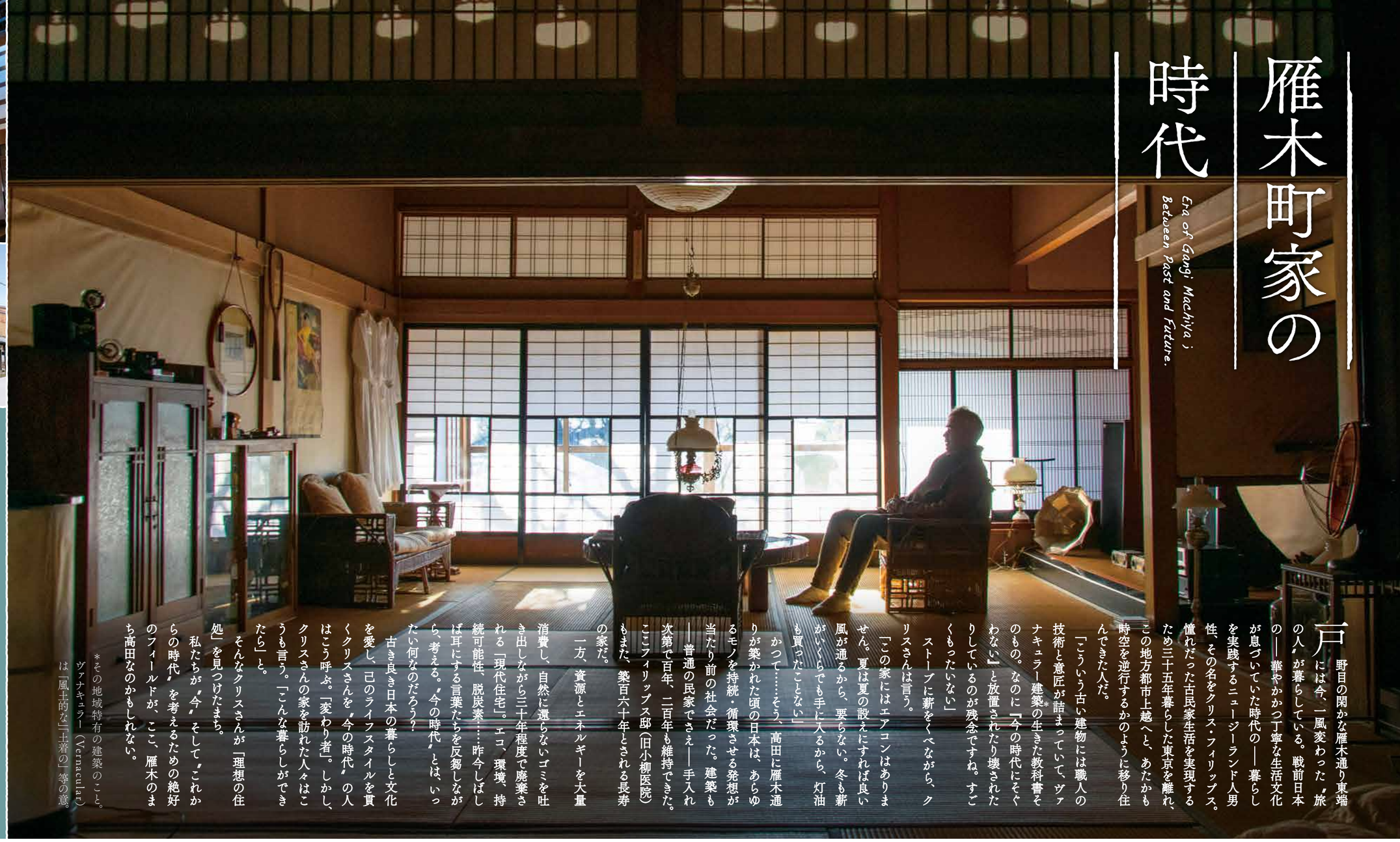
そこに住む人にとって、雁木町家は生活の一部。「当たり前のもの」という認識が普通の感覚だろう。さらには「離れたい」、「手放したい」と考える人が少なくはないのも、居住者の高齢化や空き家化をみれば、明らかな事実。

一方で、雁木町家を「特別なもの」と捉え、次の時代へ残していこうとしている人々もいる。その想いやヴィジョンを取材し、一冊にまとめた。

途切れながらも長く連なる雁木のように、想いが世代・時代を超え「つぎつぎ」と繋がっていくように――。

見慣れたまちも、
視点が変われば表情が変わる。
この表紙の写真たちは皆、
様々な立場の人が
それぞれの眼差しで捉えた
「雁木のまち高田」の
魅力的なワンシーンです。
あなたの目に映る
「雁木のまち高田」は、
どんな表情をしていますか？

#Fav 雁木高田



雁木町家の時代

Era of Gangi Machiya ; Between Past and Future.

戸野目の閑かな雁木通り東端には今、一風変わった〝旅の人〟が暮らしている。戦前日本の――華やかかつ丁寧な生活文化が息づいていた時代の――暮らしを実践するニュージーランド人男性、その名をクリス・フィリップス。憧れだった古民家生活を実現するため三十五年暮らした東京を離れ、この地方都市上越へと、あたかも時空を逆行するかのように移り住んできた人だ。

「こういう古い建物には職人の技術と意匠が詰まっていて、ヴァナキュラー建築*の生きた教科書そのもの。なのに『今の時代にそぐわない』と放置されたり壊されたりしているのが残念ですね。すごくもったいない」

ストーブに薪をくべながら、クリスさんは言う。

「この家にはエアコンはありません。夏は夏の設えにすれば良い風が通るから、要らない。冬も薪がいくらでも手に入るから、灯油も買ったことない」

かつて……そう、高田に雁木通りが築かれた頃の日本は、あらゆるモノを持続・循環させる発想が当たり前の社会だった。建築も――普通の民家でさえ――手入れ次第で百年、二百年も維持できた。ここフィリップス邸(旧小柳医院)もまた、築百六十年とされる長寿の家だ。

一方、資源とエネルギーを大量消費し、自然に還らないゴミを吐き出しながら三十年程度で廃棄される「現代住宅」。エコ、環境、持続可能性、脱炭素……昨今しばしば耳にする言葉たちを反芻しながら、考える。〝今の時代〟とは、いったい何なのだろう?

古き良き日本の暮らしと文化を愛し、己のライフスタイルを貫くクリスさんを〝今の時代〟の人はこう呼ぶ。「変わり者」。しかし、クリスさんの家を訪れた人々はこうも言う。「こんな暮らしができたら」と。

そんなクリスさんが「理想の住処」を見つけたまち。

私たちが〝今〟そして〝これからの時代〟を考えるための絶好のフィールドが、ここ、雁木のまち高田なのかもしれない。

*その地域特有の建築のこと。ヴァナキュラー(Vernacular)は「風土的な」「土着の」等の意。

INTERVIEW

雁木のまち再生　理事

クリス・フィリップス

日本に暮らして約40年。(元)翻訳家。東京生活の中で、ある時、上越高田のイベント(あわゆき道中)を知り参加。季節ごとに表情を変える風景や、古いものが残るまちに魅力を感じて来越を重ねるにつれ縁が広がり、2017年にIターン。現在は住家の修繕とともに、蒐集した古道具のレストアを楽しむ日々。「ビンボーリッチ」と自称し、シンプルでゴージャスな毎日を送る。

雁木のまち再生の主な事業とこれまで

2016年、上越市高田の雁木町家エリアにおいても空き家の増加が目立ってきた中、「雁木のまち並みとそこで暮らす人たちが培ってきた互助精神を次世代につなげたい」という想いから設立された一般社団法人。町家を残したい・探している・活用方法を模索している人々のパイプ役となり、「雪国の雁木町家の継承と活用」を目指す。

県内外の団体とのまちづくり交流

新潟県まちなみネットワーク、全国町並み保存連盟、金澤町家研究会などの研修会に参加・事例発表

空き家の取得・改修、活用支援

「仲六 青苧のいえ」「雁木の宿 町の家」などの民泊や「兎に角」「こめつぶ」などオフィス・カフェ等の開業支援

視察・研究の受入、学習会の開催

市内外の一般・学生の研究やゼミ、小中学生の総合学習への案内や協力、まちづくりに関連する学習会の開催

空き家情報の発信と共有

メーリングリストやSNSを活用し、情報を発信・共有。メディアへの発信・対応

＋

メンバーの専門分野業務

- 相続・登記についての調査と事務手続きのサポート
- 開業に伴うリノベーションの支援協力(設計と工事監理、維持修繕)
- まちづくり事業の企画や助成事業のアドバイスなど

雁木のまちを次世代へ

2016.10　上越市から**旧今井染物屋※の公開・活用の事業委託**を受け、音楽イベントや講座など各種企画を実施

※江戸時代末期に建てられた、高田に現存する最古の町家。現在は常設工房が設備され、上越市が管理・運営。

2020.6　戸野目「こうじや」にて**「くらしのシルエット展」**開催

2021.9　**雁木町家のある高田をつなぐマガジン「つぎつぎ」**発行

2022.2

代表理事

関 由有子(一級建築士)

上越市出身。フィンランド留学後、1997年にUターンし建築設計監理業を始める。歴史的な建物とまちなみ景観、高田世界館や瞽女ミュージアムの再生活動などに関わる。

理事

岩野 秀人(司法書士)

上越市出身。20年間の東京生活を経てUターンし司法書士事務所を経営する。上越市や新潟県司法書士会の空き家問題対策委員などを務め空き家問題に携わる。

理事

打田 亮介(二級建築士)

北海道出身。上越へ移住後、町家カフェ開業(現在は閉店)を経てリノベーション専門の建築会社を設立。町家複合施設「兎に角」運営。市民グループ「キナイヤプロジェクト」代表。

とある町家の今昔つぎつぎ物語

旧丸慶商店 ▼ 町家複合施設 兎に角

□明治元年築
□上越市仲町4丁目

現在、「町家複合施設 兎に角 -Tonikaku-」として賑わいを見せている一軒の雁木町家。どのようにして現在の形へと生まれ変わったのか、その変遷をご紹介します。

まち並みを壊すのは気が進まず、悩んでいた

［旧丸慶商店］阿部 昌榮 さん

妻は三姉妹の末っ子で姉二人は先に嫁いでおり、私も一人っ子長男だったためにこの家には跡取りがいなくなってしまった。そのため義父母と妻と私、親子の会話・交流の中で、いつしか「この町家のことは私が何とかする」という暗黙の了解ができていました。

義父、義母を見送り、いよいよその時が来た。しかし私ら夫婦もすでに東京暮らしで数十年経っており、もう移住は考えられない歳だし、管理に通うのも容易ではない。でも、離れても故郷は故郷ですから、解体して高田のこのまち並みを壊してしまうのは気が進みませんでした。

どうするか……と悩んでいたところ、雁木のまち再生さんとのご縁があったのです。共通の知人が代表の関さんに「良い家だけど、あの家は空き家になるかも」と教えてくださっていたそうで、関さんから「私たちにお手伝いできることがあれば」とお申し出いただき、胸を撫でおろしました。

建築士さん、司法書士さん、税理士さんらの揃っておられる法人ですから安心して託すことができましたし、今こんな風に良い形で生かしてもらえていて、妻も私も大変感謝いたしております。

Focus 日頃からの話し合い

義父母の存命中から、義姉家族それぞれとの交流を大切にしてきていました。日頃から良い関係を築けていれば、相続等、いざという時もスルスルと事が進む。おかげで雁木のまち再生さんに譲渡すると伝えた時もスムーズでした。相続に限らず、日頃からいろいろな話をしておくことが大切だと思います。

高田出身・東京在住。かつてこの町家には義父母が居住し、衣類卸問屋「丸慶商店」を営んでいた。妻の実家。

高田をより面白く、人が行き交うまちに

［町家複合施設 兎に角］打田 亮介 さん

北海道出身、2016年に東京から高田へ移住。合同会社ニトデザイン&リビルド代表。雁木のまち再生からこの町家を賃借、テナントを誘致しサブリース形態で運営。2階に自社オフィスを構えている。

移住先を上越に決めたのは、古いもの新しいものが混ざり合って今に残っている高田のこの雁木のまち並みが魅力的だったからです。ただ、同時に「通りを歩く人が少なくてもったいない」とも感じました。でも逆に、そこがこのまちのポテンシャルじゃないかとも思えて、この5年、色々と挑戦してきているところです。

最初はリノベーションや町家の魅力を見て知ってもらう目的と、自分も地域の方と知り合える場が欲しかったので、東本町の町家を借りてカフェを開きました。徐々に建築の仕事が増え、2019年からは『兎に角』の準備にシフト。以前のカフェとは違った形での町家の活用方法と見せ方とを考え、2020年にオープンしました。

『兎に角』は2階がシェアオフィスで、1階にはコーヒースタンドがあり、いつでもどなたでも立ち寄っていただけます。

1階奥のシェアキッチンは今まさに「お試しの場」のような形で色々な方に使ってもらっていますが、他にも起業や移住をしたい人がお試しで使える町家がこれからもっと増えるといいなということも考えています。

高田がより面白く、人が行き交うまちになるよう、『兎に角』がそのきっかけのひとつになれば嬉しいです。

『兎に角』シェアキッチン

Focus インフラとしての「お試し町家」

自分は移住・起業の経験と、5年住んで今は住民としての目線もあり、「新しい人がこのまちにやってくる時、地域住民の側にはきちんと地域との関係を築いてもらえる人かどうかが重要なんだよな」と感じています。そのためのしくみ・環境としての「お試し町家」。

起業や移住は人生の大きな決断ですから、一歩踏み出そうとしている人にとって挑戦の場があるのは良いことだし、地域側にとっては新しくやってきた人との“関わりしろ”になります。これからのまちづくりに、きっと必要なインフラになると考えています。

司法書士のつぶやき

町家を誰に託すのか

雁木のまち再生 理事
岩野 秀人

昨今、「負動産」を早く手放したいと50万円や100万円といった破格で売却される空き家が全国で増加中です。一方で、不労所得を期待してか「投資」と称して空き家を売買する動きが目立ってきてもいます。

空き家管理は物心両面で負担を伴うものですから、手放せるならタダでもいい、引き取ってくれるなら誰でもいいという心情は解ります。しかし**問題となるのはその後の管理**です。空き家を財テクのコマのように扱う購入者が、責任をもって維持管理を行うとは考えにくい。

放置やずさんな管理はまちの荒廃につながり、冬の大雪、夏の雑草、鳥獣の棲処となったり、漏電火災など、その責任は所有者にあるとしても、**被害を受けるのは近隣の地域住民です。**ぴったり並び立つ町家はその影響がより大きいのは言うまでもありません。

家は個人（または法人）の所有物ですが、まちの一部、地域の一部でもあります。**信頼して託せる相手かどうか、その見極めは非常に重要です。**

Focus

空き家の増加は地域住民にとって危険・不安の増大につながります。また、近隣に顔や名前の分からない空き家所有者が増えるのも問題の種となり得るでしょう。

当法人は、町家を手放したい人・活用したい人の架け橋となり、雁木のまち高田をよりよい形で次世代へと継承することを目指し、活動して参ります。

打田さんはそれらの機会に色々な形で関わってこられた実績があり、その上で『兎に角』の事業計画もお聞きし、仲四ハウスを託すと決定しました。今年度からは当法人の理事にも加わってもらい、一層の活躍を期待しているところです。

一般社団法人
雁木のまち再生

2018年にこの町家を購入し、法人として所有。2019年より打田さん（ニトデザイン&リビルド）に賃貸。

「仲四ハウス」試行期

共通の知人から空き家（予備軍）情報が寄せられ、阿部さんもまさに今後についてお悩みの最中でした。古い町家ですが造りも状態も良く、阿部さんも解体は望んでおられませんでしたので、当法人で所有権を譲り受けることになりました。

『兎に角』になるまでの間は「仲四ハウス」という通称で、町家利活用のアイデアを試行する場として広く地域の皆さんに関わっていただきました。DIYワークショップや古本・古着のチャレンジショップ、地域団体によるイベントや音楽ライブなどです。

つぎつぎ
雁木町家のある高田をつなぐマガジン

本誌へのご感想やお問合せは…
ganginomachisaisei@gmail.com

この冊子は（一社）北陸地域づくり協会の助成を受け発行したものです。

発行日：2022年2月22日
発行者：関 由有子
発行元：一般社団法人 雁木のまち再生
監　修：池田 なつき（株式会社 桐朋）

雁木のまち再生 HP

あのひと　この場所
feature!

雁木町家 Hot Spot

連なる雁木。北折さんの愛する「何気ない美しい景色」のひとつ

「ねこま」内部
今後の展開に心が弾む

Bookバル「ほんや」
地域のお茶の間で話に花が咲く

TAKADA HONCHO 2

高田町家こめつぶ & まめつぶ珈琲焙煎所

先頃、高田の本町２丁目に築80年の雁木町家をリノベーションした「高田町家こめつぶ」がオープンしました。路面ミセ部分は「まめつぶ珈琲焙煎所」、奥にはこの町家を所有運営する「株式会社のりしろ」のサテライトオフィスがあり、２階はコワーキングスペースになっています。のりしろ代表の小林拓也さんにお話を伺いました。

時間
火～金 … 10:00～19:00
土　　… 9:00～18:00
＊〈まめつぶ〉は完売しだい閉店の場合あり / 今後、営業時間変更の可能性あり

駐車場
近隣のコインパーキングをご利用ください

〈のりしろ〉HP

古い雁木町家に新しい命が吹き込まれました。どういう経緯でこの「高田町家こめつぶ」をつくられたのですか？

東京で起業しましたが、元々いずれ上越に戻りたいと考えていました。両親もいるし、子育ては自然豊かなところが良くて。今はまだ東京と行き来してますが、**数年以内に上越を主拠点にする予定**です。

だから少なくともそれまでの間はこの町家に常在してくれる人が必要。珈琲焙煎所をやろうというのは、最初に決めました。

珈琲焙煎所というのは何かこだわりが？

香りと記憶の結び付きって強いと思うんですよ。**コーヒーの香りを通じてここを思い出してもらえるといいな、という発想**です。「コーヒーの香りをかぐとあの雁木通りを思い出す」みたいな。焙煎士の池田さんとは知人を介して出会ったんですけど、「まめつぶ」のために山梨から移住してくださったんですよ。池田さんがいなければ「高田町家こめつぶ」はきっと今もまだ計画のままでした。ご縁に感謝してます！

この町家との出会いはどのように？

私の母が雁木のまち再生の方と同級生で、物件紹介をお願いしました。この町家は古いけど歪みも少なく吹き抜けも綺麗で、まだまだ使える。しかも昔は薬屋さんだったんですよね。他の物件もありましたが、これもまた特別なご縁を感じてここに決めました。実は独立して初めての仕事が薬局の設計だったんです。

小林さんのこれからの展望を教えてください。

これからは……**個性豊かな建物が雁木で繋がっていて、歩いて巡れるような、高田をそんなまちにしていけたらいいな**と思っています。「こめつぶ」がそのひとつになると嬉しいです。まちが楽しければ好きになってくれる人が増えるし、好きになってくれれば大事にしてもらえますよね。建築士として地域に貢献するのって、こんな方法でもいいんじゃないかな。

一級建築士 / 古民家鑑定士
小林 拓也 さん
こばやし　たくや

株式会社のりしろ 代表取締役社長。上越市出身。東京で会社勤務を経て独立起業し、全国各地で設計等の仕事を手掛ける。2020年、上越市本町２丁目の雁木町家を取得し、2021年「高田町家こめつぶ」をオープン。

焙煎したてのコーヒー豆と焙煎士の池田さん

雁木にコーヒー豆の豊かな香りが漂う

2F コワーキングスペース

元の造りが活かされている吹き抜け

SHIKASHO - TONOME

Bookバル ほんや & ねこま / はたご / こうじや / たなやかた

城下町高田の雁木エリア東端に位置する四ケ所・戸野目に、空き家となった町家を手入れしながら、ユニークな活用を展開されている方がいます。山形出身で、東京から移住された北折佳司さんです。今こちらの地区では、北折さんの取り組みに呼応するかのように、新たな動きも芽吹き始めています。

A Bookバル ほんや
毎日9:00～17:00開放
＊貸切使用をご希望の場合は要事前連絡

B ねこま　C はたご
D こうじや　E たなやかた
見学・利用は要事前連絡
TEL 090-5192-6418

〈ぱとべ〉HP

今、四ケ所・戸野目では何軒くらい活用されているのですか？

この辺りだと……町家が４軒と蔵が１棟です。Bookバル「ほんや」、「ねこま」、民泊「はたご」、かつて糀屋さんだった明治町家「こうじや」。あと、蔵の美術館「たなやかた」。

「ほんや」は今、若い人たちが１階に音楽スタジオを作っています。それから「**ねこま**」は長らく空き家でひどく荒れてたけど、きれいに片づけて、今は「**ここを使いたい**」**と言ってくれている人たちと整備中**です。

その活動の原動力は、どこから？

まず、古い建築が好き。昔から古民家の暮らしに憧れていました。でも、私が学生時代を過ごした仙台も懐かしい景色が今どんどん失われつつあるそうですが、上越もこのままいくとね……。一度失われてしまうと元に戻すのは難しい。

私はこの雁木通りや裏庭、路地裏の風情なんかも、とても良いものだと思うんです。**こういう何気ない美しい景色を、守っていきたい。**

今後も何か計画されていますか？

次は東本町の町家をゲストハウスにする予定です。旅の人が、上越の海へ山へと遊びに行ける起点となるような場所をイメージしています。もちろん、雁木通りを周遊してもいい。

そうそう、東本町や稲田は高田の中心部からこの辺りまでをつなぐまちでしょう。そのあちこちに、食事やお茶や、ちょっと買い物などできる場所があったら、面白くなると思いませんか。

おひとりで全て管理運用されるのは大変ではありませんか？

ひとりで全部何とかしようとは思っていません。「ほんや」や「ねこま」のように、**ずっと放置されていた空き家も、少し手入れしてやると不思議と「使ってみたい」「欲しい」という人が現れる**んですよ。「こうじや」でも、この前の９月に雁木のまち再生さんが「くらしのシルエット展*」を開催してくれましたよね。あれは良かった。雁木通りがアートのまちになったら、面白いですよね。

色々なご縁で、協力の輪がゆっくり広がっている感じ。アイデアは尽きませんが、私は私にやれることをあれこれ試しつつ、発信もしながら、**後のことは少しずつ若い力に引き継いでいきたい**と思っています。

一級建築士
北折 佳司 さん
きたおり　よしじ

山形市出身。都内での設計事務所経営に幕を引き、古民家暮らし実現に向け上越市板倉区に移住。以来、自宅を含む複数の古民家の改修・保存に取り組む。北折流アルベルゴ・ディフーゾ=『ぱとべ』構想の下、2020年、四ケ所に民泊「はたご」を開業し板倉から転居。本のある談話室「Bookバルほんや」、蔵の美術館「たなやかた」等を続々オープン。

memo

＊くらしのシルエット展

雁木のまち再生「アート町家プロジェクト」のプレ企画（＝vol.0）。古い町家を会場に、雁木のまち高田に暮らす若い人々の日常の写真を展示し、町家独特の光と影と、彼らのまなざしとを通じて「雁木のまち高田を体感する」というコンセプトで開催された。元空き家の会場に延べ137人が来場し、大好評を得た。

つぎつぎ　雁木町家のある高田をつなぐマガジン

つぎつぎ

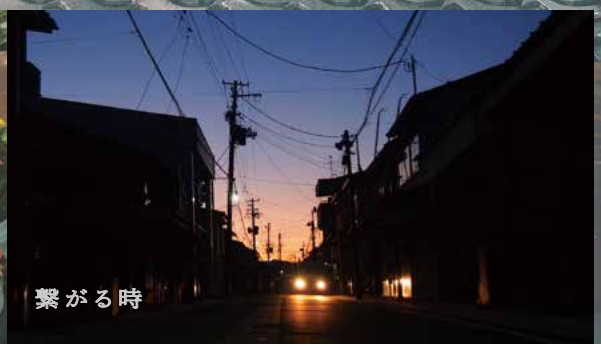
雁木町家のある高田をつなぐマガジン

二〇二二年 二月

TAKADA GANGI FREE MAGAZINE

雪国の日常

明日へ続いてく



繋がる時

雁木のまち高田を発信したい人たちが集った「つぎつぎ」編集部 こぼれ話

荻谷 有花
［ デザイン 担当 ］

雁木町家のレトロな看板や装飾、言葉にするのは難しい「なんかよい」ものを、表紙に入れました。あなたの「なんかよい」も見つかると嬉しいです。

杉田 佑介
［ 雁木町家 Hot Spot 担当 ］

小林さん…高校生のときに高田公園で見た景色が今に繋がっている!? / 北折さん…アイデアは無尽蔵？ ぱとぺ構想は進化しています！

小山 郁美
［ 今昔つぎつぎ物語 担当 ］

「家をどうするか？」なかなか話しにくい話題だと思います。このページが少しでもきっかけになれば、そんな想いで作成しました。

吉田 容子
［ 雁木町家の時代 担当 ］

空き家再生へのさまざまなアプローチにふむふむ。そしてフィリップスさんの創意工夫のモノ再生力と、その集大成でもあるお宅に感嘆と感動でした。

大嶋 大貴
［ 表紙 担当 ］

今だからこそ、昔の街並みが映える。今を生きる我々だからこそ雁木町家を活かせる。そして次の時代もこの景色を残していけたらと。

お願い お手元のこの冊子を別居のご家族や上越を離れたご友人等にお送りいただき、雁木のまち高田の未来に想いを致す人の輪を広げていただければ幸いです。